

# 葬送の変化と祖先祭祀行事の 自動車社会化

## 沖縄本島中南部の事例

Changes in Funeral Customs and the Increasing Use of  
Automobiles at Ancestor Worship :  
A Case Study of the South-Central Part of Okinawa Main Island

武井基晃

TAKEI Motoaki

はじめに

① 沖縄の葬送・墓制と自動車社会化

② 調査地概要

③ 昭和・平成の葬送事例の報告と比較

④ 自動車の利用

⑤ 自動車での移動をともなう祖先祭祀行事の実例

おわりに

### 【論文要旨】

本稿では火葬の導入・葬祭業者の関与および自動車社会化の進展という2つの変化を通して戦後の沖縄での高度経済成長とその前後における葬送墓制の変化という課題を考えていく。①では沖縄の葬送・墓制と自動車社会化についての概略を記述する。②では調査対象地とした沖縄本島中南部の中頭郡中城村（家族墓地域）の集落についてその概要や屋取集落という歴史的背景を説明する。また『死・葬送・墓制資料集成』での沖縄県の調査対象地域だった南風原町（門中墓地域）の喜屋武についても概要を述べる。③では中城村の昭和と平成の葬送の調査票を参照しながら火葬の導入や葬祭業者の関与による変化を論じる。たとえば葬儀の日程は火葬場の利用スケジュールをおさえられるかに左右される。葬祭業者の関与については最近のある葬式の経費を提示し告別式から四十九日までの支出の傾向を分析する。また南風原町喜屋武の事例との比較も試みる。

④ではまず記事をもとに自動車社会化の進展と葬法の変化も相まって遺体運搬に用いられてきた籠が廃され自動車（霊柩車）が導入される過程などを追う。また自家用の乗用自動車台数や県下の免許保有者数などの統計資料を提示し戦後から復帰前の沖縄でどのように自動車社会化が進んだかを明らかにする。そして⑤では今日の沖縄で祖先祭祀の行事（清明祭の墓参りやウマチーという宗家のブツダン参り）が自動車での移動を前提に実際どのように行われているかを筆者が同行した事例から記述する。そこから自動車での移動のおかげで年配者でも行事に参加し続けられる一方でそのことが行事の参加者の世代交替を阻んでいる面もあることを指摘する。

【キーワード】 火葬の導入, 葬祭業者の関与, 昭和の事例と平成の事例, 祖先祭祀, 自動車社会化

## はじめに

高度経済成長とその前後における葬送墓制の変化という課題を戦後の沖縄県の事例で論じるに当たって、本稿では2つの変化に着目して、事例を提示し分析していく。

1つは、火葬の導入・葬祭業者の関与という葬送研究では既に看過できないものとなって久しい外部化による葬送の変化である。これについては沖縄本島中南部の中城村を調査対象地に設定し、改めて昭和時代と平成時代の葬送墓制の調査票（資料紹介として掲載）を提示し、両時代の比較を試みる。葬祭業者の関与と葬儀の前の火葬が当たり前となった今日の沖縄において、葬儀社と宗教者（僧侶）の関与は葬送のどのような場面でいかに現れるか、火葬場のスケジュールや火葬場で燃やせる物の制限によって葬送の過程や副葬品などがどのように変わったか、葬祭業者のサービスの対価はいくらくらいかかるのかなどの諸点について具体例から論じていく。

もう1つは、戦後沖縄における自動車社会化の進展によって引き起こされた、祖先祭祀の行事の変化である。まず、戦後の沖縄における自動車社会化はどのように進展したかについて、統計資料などをもとにおさえていく。その上で、その変化は葬送と祖先祭祀の場面にどのような影響を与えたか、今日の祖先祭祀の行事が自動車による移動をとまって実際どのように執り行われているか、自動車社会化の進展のおかげで沖縄の祖先祭祀の行事がいかに容易かつ気軽なものとなり、一方そのことが原因となって参加者の世代および参加者の世代交替はどのように変わったかを考えていきたい。以上について本稿では、『死・葬送・墓制資料集成』での沖縄県の調査対象地域だった南風原町の喜屋武〔赤嶺 2000〕についても言及しながら論述していく。

## ①……………沖縄の葬送・墓制と自動車社会化

### (1) 葬送・墓制の概略

火葬導入前の沖縄では、葬送は大まかに言うところ《自宅に葬儀→遺体を墓へ→数年後に洗骨・改葬》という過程だった。数年をかけて墓内で白骨化させ、その骨を改めて甕などに収めたのである。この過程は、火葬の導入で《自宅から遺体を火葬場へ→遺骨を自宅に戻し葬儀→遺骨を墓へ》になった。葬儀の前に火葬を施すので火葬の時と納骨の時の2度自宅を出ることになり、また火葬によって白骨化が済んでいるので納骨後に洗骨・改葬することはない。<sup>(1)</sup>

戦後の火葬導入後の沖縄本島中南部における葬式の概略を加藤正春は次のように述べている。「戦後に火葬が普及するようになると、火葬を葬儀過程のどこに組み入れるかに関して地域的な差異が生じた。沖縄本島中南部では、火葬は儀礼過程のはじめに組み入れられ、その後に葬儀（「告別式」）と納骨が行われるようになった。／死者はまず家族や近親、集落の人々の見守るなかで入棺され、自動車で火葬場に向かった（略）頃合いを見計らってふたたび火葬場におもむき拾骨した。家にもどってきた骨は仏壇の前に安置され、「告別式」が行われた。（略）やがて2度目の出棺となり、骨は墓に送られた」〔加藤 2010 121頁〕。

しかし、葬儀の前に火葬を施すためにはいろいろと時間を合わさなければならない。まず死亡から24時間経ってからでないと火葬の許可が下りないし、また、そのタイミングに火葬ができるかは火葬場のスケジュールを押さえられるかに左右される。葬儀の前の火葬が当たり前となった今日、火葬場のスケジュールや火葬場で燃やせる物の制限によって、葬送の過程や副葬品がどのように変わったか、火葬場への往復に自動車がいかに不可欠か、葬列の時の喪主の持ち物がどう変わったかなどを、最近の具体的な事例から見ていくことを目的の1つとする。

ところで沖縄の墓地を、その利用と所有の観点から見ると、大きく分けて4つに分かれる。①村墓、②模合墓、③門中墓、④家族墓である。①～③はいずれも複数の家族による共同利用で、村墓は村（ムラ）の住民での共用、模合墓（寄合墓）は複数の家族での共用、門中墓は父系の親族集団（門中）の成員での共有である。一方、④家族墓（家墓、一家墓）は1家族が1つの墓を利用する。つまり、分家して一家をなした場合、いずれその家の成員が納骨される墓を作ることが必要とされるわけである。

このほか、沖縄の墓には、今日でも納骨され利用され続けている墓の他に、たとえば元祖の墓のように、先祖の骨が納骨されて清明祭の墓参りの対象となっているが、すでに追加の納骨はなされない墓もあり、主に門中単位で所有され祭祀対象となっている。本稿では後半で、中南部の中城村の人が首里など他地区の先祖の墓や宗家のブツダンを拝む事例、南風原町の人が門中墓に加え古い時代（按司の時代）のものとされる墓を拝む事例を提示していく。

## (2) 自動車社会化という変化

本稿の後半ではさらに、沖縄の経済成長の一要素として、自動車社会化の過程とそれが生活にもたらした変化について着目する。沖縄本島の自動車社会化の初期の様子を記事と統計資料で追跡し、さらに筆者自身による同行調査をもとに、今日の祖先祭祀の行事が自動車による移動をともな<sup>(2)</sup>ってどのように執り行われているかについて記述していく。

戦前から戦後にかけての沖縄の交通網については、宮城邦治が端的にまとめている。「戦前の沖縄本島の交通網は、主として那覇市から与那原、嘉手納、糸満へ敷設・運行されていた軽便鉄道と民間経営のバスが中心であった」がいずれも沖縄戦によって破壊されてしまった[宮城 2013 153-154 頁]。戦後「時折走る米軍車両が、人々を乗せていく事もあったが、それは交通網というには、ほど遠いものであった」。「1947 年、米軍は沖縄全島での昼間の自由な通行を許可、米軍車両等の自動車を左側通行とした。そのような中、米軍から廃棄されたトラックなどを修繕・改良し、交通の足として利用するものが現れるようになったが、定期的なルートはなく、いわば道すがらの交通網であった。しかし、沖縄の交通網の復活は意外に早く、1950 年には民間のバス会社が設立され、人々の往来はバスを中心に、より活発になってきた」[同 138 頁]。その後「軍道 1 号線」（現在の国道 58 号線）が那覇・名護間に整備され、復帰後「1973 年には北部一周線の道路改良舗装工事が完成。1975 年には沖縄自動車道の石川・許田間が開通し、許田と名護市内を結ぶ国道 58 号線は拡幅された。1987 年には沖縄自動車道の石川・那覇間が開通し、那覇と名護は大きな交通動脈で結ばれることになった」[同 154 頁]。なお、左側通行は復帰後も 6 年間続き「車は左、人は右」が周知され右側通行になるのは 1978 年である。

沖縄における自動車社会化の進展が、葬送に直接もたらした影響について、長嶺操は沖縄本島南部の糸満市糸満から八重瀬町港川への移住した漁民の葬送を事例に報告している。それによると「港川の糸満漁民は、港川の地に墓をつくらず、糸満に所在する血縁集団の共同墓である門中墓を利用しているので、葬式の時には糸満まで行くことになる。火葬にふし、告別式が終われば、納骨のために、糸満の墓まで通っている。それは糸満漁民が港川に移住するようになってから、継続されてきた」のだが「港川には、龕は無かったので、隣の字長毛や南城市玉城字前川所有の龕を借りていた。糸満までの葬式道で、龕を担ぐことを止め地面に置くのは、富盛での休憩のときだけであった。現在は火葬になっているので、自宅で告別式をおえたら、車を利用し、糸満の墓へ納骨している」[長嶺2012 12-13頁]。かつては龕を担いで歩いて通っていた約11kmの距離を、現在は自動車で移動している。また幸地腹・赤比儀腹両門中の門中墓は、洗骨の儀礼場の廃棄物を棄てる塵捨て場を駐車場に変えた[同27頁]。火葬の導入で不要になった洗骨のための敷地が、自動車社会化に対応して駐車場として活用されているのである<sup>(3)</sup>。

## ②……………調査地概要

### (1) 中城村の屋取集落

中城村は沖縄本島の<sup>なかがみ</sup>中頭郡にある人口＝18,830人／7,243世帯（2013年10月現在）の行政村である。村の東半分は海岸沿いの平地、西半分は台地になっている。平地と台地の標高差は約100mある。平地と台地の境目に、ちょうど村の中央を貫くようにして国道が走っている。今日、南上原の字内に琉球大学が移ってきたのをはじめ西半分の台地上は都市化が進んでいる。一方、村役場や小中学校、郵便局などのある東側の平地は農業（サトウキビ、野菜、花卉）を主体とする地域となっている。

王府時代の中城村は隣接する北中城村と合わせて中城間切といった。間切内（現在の中城村と北中城村の境）にある中城グスクは天順2（1458）年に第一尚氏の実力者・護左丸が討ち取られた居城として知られ、首里城や他のグスク群とともに世界遺産に登録されている。明治時代になり間切制の廃止によって中城間切は中城村に移行した。そしてそれまでの「村」は「字」となった。

第二次世界大戦末期のいわゆる沖縄戦では、中城村内でも中城グスク一帯、北上原、南上原（現琉球大学周辺）、そして和宇慶で激しい戦闘が行われた。昭和20（1945）年4月1日に米軍の上陸を受けて首里城にある日本軍司令部が「大謝名（宜野湾）―和宇慶（中城）ライン」を前線に設定したからである。その前線は突破され、主戦場は沖縄南部に移っていった。しかも中城村民は更なる激戦区となった島尻に避難していて、避難先でも大勢の死者が出た。生き残った人たちが村に帰ってきたとき、そこには家も畑も何も残っていなかった。大戦後に字久場に久場崎引揚民収容所が建てられ、こことインヌミ（美里村高原。現沖縄市）の両引揚民収容所には17万人の海外からの引揚民が収容された。この久場崎引揚民収容所によって中城村の北部が分断されたことからそこは北中城村となり、残る中城村とは別の行政村となって現在に至る。

本稿の事例は、中城村内でも、琉球王府時代から明治初頭にかけて士族によって開墾された屋取



集落に住む住民（士族系門中の成員）の葬式と祖先祭祀についてである。屋取集落とは、首里で生活できなくなった琉球王府士族の子弟が首里を離れ間切に移住し、海岸低地や山林を開墾して成立した集落のことである。

本稿で主な調査対象とするのは、次の2つである<sup>(4)</sup>。

中城村北浜の仲松家（昭和の事例）：北浜はもともと海岸低地の屋取集落で、洪氏門中という士族の門中の仲松姓の家々が多かったことから仲松屋取と称された。それが昭和時代に北浜という字として独立し今日に至る。今も仲松姓が住民の大半を占める（行政区北浜は501人／188世帯。2013年10月現在）。

中城村屋宜の仲真家（平成の事例）：琉球王府時代の屋宜村の内、琉球王府時代から士族の名門・馬氏の仲真姓の家々が開墾した一帯は仲真屋取と称された。仲真屋取は字として独立しておらず屋宜の一部のまま現在に至る（行政区屋宜は758人／266世帯。2013年10月現在）。

ここで大正時代の記録を参照すると、大正14年の「沖縄縣下各町村字並屋取調」の調査票<sup>(5)</sup>には、字内にある「所属屋取名」の欄に、それぞれ字津覇内の「仲松」と字屋宜内の「仲真」として記録されている。これより少し早い大正8年に作成された中頭郡中城村の「註記調書」<sup>(6)</sup>には、「字名」と「字ニ属スル部落名」の項目があるものの、仲松の方は字津覇の「津覇濱屋取」（15戸／79人）と字和宇慶の「和宇慶濱屋取」（79戸／418人）というように現在の北浜（仲松屋取）と南浜（安里屋取）が区別なく記載され、また仲真のほうは「字ニ属スル部落名」としては記録されず字屋宜（108戸／552人）に含まれている。

以下、本稿では、北浜の仲松家の昭和の葬送の事例（火葬せず墓に納め数年後に洗骨。葬儀社の関与なし）、屋宜の仲真家の平成の葬送の事例（火葬骨を墓に納める。葬儀社の関与あり）を、適宜それぞれの「調査票」（資料紹介に掲載）を参照しながら論述する。中城村では、家族墓（1家族につき1つの墓）が基本である。つまり分家した場合、いずれその家の墓を建てなければならない。その家の墓とは別に、清明祭においては祖先の墓を特に拝むことがある。これを神御清明（カミウシーミー）という。また、門中の宗家のブツダン<sup>(7)</sup>を拝む御祭（ウマチー）という行事もある。

これらの年中行事の機会に、士族の子弟また子孫たちは、首里などの大宗家・小宗家の墓やブツダンを拝みに駆けつけてきた。かつては、距離がある場合は若者たちが一族を代表して徒歩で向いていたのだが、それが自動車社会化によってどのように変化したかも本稿では視野に入れ筆者の同行時の事例をもとに論じていく。

## （2）南風原喜屋武

本稿では『死・葬送・墓制資料集成』での、沖縄県の調査対象地域だった南風原町の喜屋武〔赤嶺 2000、赤嶺 2002〕についても言及する。

喜屋武は、大正8年の島尻郡南風原村の「註記調書」には123戸／689人、大正14年の「沖縄縣下各町村字並屋取調」には124戸と記録されている。現在の人口は南風原町全体が36,079人／12,941世帯で、行政区の喜屋武は1,195人／419世帯である（2013年2月現在）。

本稿の調査地、中城村と南風原町では墓制が大きく異なる。中城村は1つの家（ヤー）ごとに1つの墓を持つ、家族墓の地域である。これに対し、南風原町は父系血縁集団である門中単位で（あるいは複数の門中で）1つの墓を共同で所有・利用し、門中を形成する人々がいずれは同じ墓に入る、門中墓の地域である。門中墓は沖縄本島の南部（島尻）に著しく分布しており、南風原町はその北限に位置する。南風原町より北の那覇市や西原町以北では、門中が形成されていても墓の共同利用は見られない。ただし、門中の成員が同じ墓に入ることはないものの、清明祭の墓参りなど祖先祭祀の際に拝む対象として先祖の墓を共有していることはあるのだが、それは門中墓とは呼ばれない。門中墓とは死後に入る墓を門中単位で複数の家族が共有する墓制を指すのである。本稿では、家族墓（1家1墓）の墓制と門中墓の墓制との、両地域の墓参りについて見比べることも目的とする。

喜屋武には複数の門中があり、喜屋武一帯に門中ごとの門中墓がある。前北谷・勝連・仲里・門・新殿内・糸満・山口などの墓は集落から歩いて県道88号線を渡ってすぐの南風平原（ヘンダバル）に並んでいる。そのほかの内原・親国・北谷の3門中の墓がある石平（イセーラ）、与論門中の墓がある宇地真原（ウジマバル）、小橋川門中の墓がある毛原（モーバル）は集落から県道88号線を挟んだ場所に広がる黄金森という森の中にある。黄金森の中には今も納骨が続くトーシー（当世）墓のほかに、古い墓（アジシー墓、按司御墓）も点在し、清明祭の墓参りの対象となっている。

喜屋武の門中で最も大きいのが内原門中の740人（129世帯。2010年現在）、少ないところは北谷門中の約20人である。

### ③……………昭和・平成の葬送事例の報告と比較—中城村の事例

#### (1) 昭和・平成の葬送事例の報告

本報告書に「資料紹介」として掲載される、沖縄県中頭郡中城村での昭和34年・平成19年の葬送・墓制の「調査票」の「葬送に関する情報」（死亡当日、死亡から葬儀まで、葬儀、出棺から埋葬（火葬）まで、帰宅とその後、葬式当日から忌明けまで、年忌供養と弔い上げ）から適宜引用し、そこから読み取れる特徴や変容を論述していく。

昭和の事例（昭和34年12月の葬式）は中城村北浜の仲松家を対象とし、2010年7月27日に調査した。平成の事例（平成19年10月の葬式）は同村屋宜の仲真家を対象とし、2010年7月23日に調査した。

##### ①死亡当日

「葬儀参加者とその役割分担」、「用意する葬具の一式」の項目を比べてみると、地域の区長が中核となって近隣の人が台所の賄いなどを手伝うことに変化はない。なお、通知に関して、沖縄では新聞の死亡広告の充実が知られている。沖縄の新聞の一般的な死亡広告には喪主だけでなく、兄弟姉妹・子・孫のほぼ全員およびそれぞれの配偶者の名前が掲載される。平成の調査票の冒頭の「葬儀に参加した家族親族の一覧」は県内の新聞に掲載された死亡広告をもとに作成したものである。沖縄県民は付き合いのある人の家族や親類（姻戚も含む）が亡くなったことを新聞の死亡広告欄で

知ると、その付き合いの深さに応じてできる限り通夜や葬儀に駆けつけるのである。

役割分担について、兩年代を比較して特徴的なのは、やはり葬儀社など血縁・地縁以外の第三者の関与である。造花をはじめとした葬具の準備は平成では葬儀社に頼っている。入棺も、昭和では墓所に運ぶ直前に、跡継ぎをはじめとする男性親族が行うべきとされていたが、平成では葬儀社が行う。湯灌については、平成では病院で看護師がしてくれるようになり、帰宅後に「自分たちでも儀式のように形だけ」簡単に行う程度である。

穴掘り役については、沖縄は石（コンクリート）造りの扉付きの墓なので必要のない役目だが、その代わりに、墓の扉を誰が開けるかが重要となる。墓を開けるべき人が干支などをふまえて決まるのは昭和から平成でも続いている。昭和では、墓の扉を開けるのにふさわしい干支の人を三世相（サンジンソウ）など詳しい人に確認し、それに該当する人に依頼して開けてもらった。平成でも死者と参列者の干支を気にしており、死者の干支からなるべく遠い人が墓を開け、その際、干支が近い人は近づかないようにしている<sup>(8)</sup>。また火葬導入前の昭和には遺体を墓に納めて数年後に洗骨したので焼き番の役割はなかったが、火葬が導入された平成では火葬場まで近い親戚がそろって行き、長男（跡取り）には火葬のスイッチを押すという新たな役割が加わっている。

葬具一式の用意について、昭和の事例では、棺・位牌・四花・花籠・旗などは近隣に作ることができる人がおり、そういった人や地域の女性たちに頼んで用意していた。特に、（紙で作る仮の）位牌はノロや神人といった役に就いていた人が指示したといい、旗も書のできる人が生前の名前や「昇天」といった文字を記した。また、遺体を墓まで運ぶのには龕（ガン。写真1・2）が用いられていた。龕はブラクごとに所有し共有していたものだったが、調査対象地の北浜は小さいブラクで龕を所有していなかったため、隣の和宇慶から有料で借りていた。もともと北浜は昭和初期に和宇慶から分立した地区なので、分立前から借りていたと考えられる。

一方、平成の事例では、棺・仮の位牌は葬儀社が持ち込んだものを使用

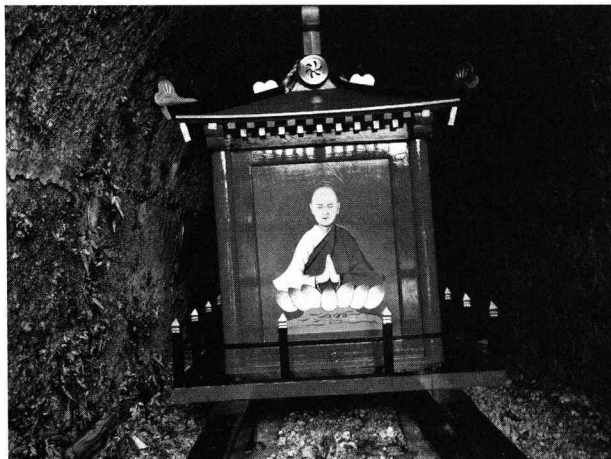


写真1 中城村津覇の龕

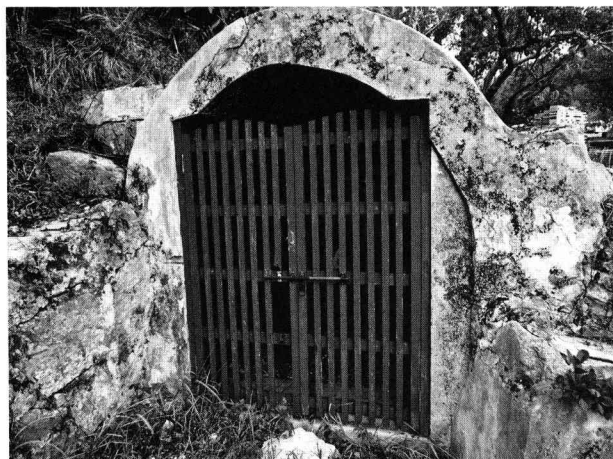


写真2 中城村津覇の龕屋

し、花籠は造花だと火葬場で燃やすことができないので葬儀社に処分を依頼した。かつて地域総出で葬式の準備に当たっていた昭和時代の事例からの変化が見受けられる。

## ②死亡から葬儀まで

通夜における僧など宗教者の役割について、昭和の事例ではその当時、近隣にいたニンブチャー（念仏者）はすでに亡くなっていたので、代わりにユタが指示に来た。ムラには2～3人は靈感が強いという人が必ずおり、ふだんはふつうに暮らしているが葬式の際には頼られて手伝っていたという。しかし平成の事例では、通夜においては宗教者の役割は聞かれなかった。地域社会内にて靈感が強いと知られる人が少なくなったと同時に、通夜において読経など宗教的な役割が特に必要とは考えられていないからであろう。

死者が出てから葬儀が終了するまでのタイムテーブルを比較してみると、昭和の事例（昼に病院で死亡）、平成に事例（朝8時10分に病院で死亡）とも、死亡当日の夜に通夜を行っている。しかし、翌日の葬儀の日程はやや異なる。なぜなら、火葬導入後は、死亡から24時間を過ぎて火葬許可を得てから火葬場の利用がいつできるかが、葬送の日程を大きく左右するからである。昭和の事例では、翌朝8時には葬儀・告別式を始め、8時半には棺を龕に乗せ、9時には墓に納めた。納骨まで丸1日経っていない。一方、平成の事例は死亡24時間後の翌朝に火葬場のスケジュールに空きがあり利用できたので、翌朝9時に出棺の準備を始めて火葬場に移動し、13時に火葬を開始した。そしてその日の夕方、涼しくなった時間帯に葬式を開いた。いずれも、死亡の翌日には納骨まで済まされるのは共通している。

入棺と副葬品については、昭和の事例は跡継ぎと近い親戚が行い、生前使っていたもの（めがね、鉛筆、財布、帽子、靴下など）とあの世へのお土産（タオルなど）を納めていた。これだけのものを入れられたのは、遺体を墓へ納めるだけだからである。しかし火葬導入後は、火葬場で燃やせないものを棺に入れられなくなったので、タオル・煙草・菓子程度のものしか入れられていない。

火葬導入後の事例では、火葬場が利用できる時間、火葬場で燃やせるものなど、火葬場の都合と事情が葬送の日程にも副葬品にも大きく影響するようになったことがわかる。

## ③葬儀

香典について、昭和の事例は昭和34（1959）年なので、当時沖縄では日本円ではなく米ドルかB円が通用していた。貧しかったのでごく少額だった。平成の事例では、ふつうの付き合いの相手への香典は1000円で、付き合いの深さによって3000円、5000円である。香典返しは、昭和はなかったが、平成ではまんじゅう・お茶・タオルが葬儀社によって用意される。参列者が何人来るかによって、葬儀社への支払い額が変動する。

葬儀の項目で最も変化が著しいのは、葬儀の場所の物と人の配置である（調査票の見取り図参照）。いずれも仏壇のある部屋に祭壇を設置すること、祭壇に向かって男性親族が右側に女性親族が左側に座ること、近い親族は祭壇側に座ることは共通している。大きく異なるのは、死者の状態である。昭和の事例では、仏壇・祭壇前の部屋の中央に遺体が布団に寝かされて安置され、その枕元には供え物と香炉が置かれていた。遺体は葬儀終了後に、棺に入れられ龕に乗せられ墓へ運ばれ

た。しかし火葬が導入され、しかも火葬を済ませた後に葬儀が行われる平成の事例では、骨壺が祭壇の真ん中に安置されるようになった。

葬儀の式次第は、昭和の事例では挨拶も読経もなく、焼香のみだった。そのため、葬儀開始から30分程度ですぐ出棺となる。一方、平成の事例では葬儀の冒頭に喪主挨拶のみが行われるようになり、その後に読経と焼香がなされる。この読経だが、檀家制度のない沖縄では葬儀社のオプションの1つであり、今回調査にご協力いただいた長男（喪主）夫婦も詳しいことはわからないという。

#### ④出棺から埋葬（火葬）まで

すでに述べたように、昭和時代、屋取集落由来のブラクである北浜では、葬列で家から墓所まで遺体（棺）を乗せる龕（ガン）を隣接する和宇慶から借りて用いていた。墓所まで龕を運ぶのは、区長の指示で集められた集落の若い人たちだった。死者の干支となるべく遠い人が墓の扉を開けた後、若者たちが棺を墓内に納め、扉を閉めるのもまた若者たちだった。北浜は中城湾に臨む海岸低地にあり、多くの墓が建てられている斜面地帯までは直線距離にして1km以上あるので、遺体を龕に乗せて墓まで運ぶのは重労働だった。

かつての出棺は葬儀後に家から墓へ納められるまでだったが、今日の出棺は、通夜後、葬儀の前に火葬場へ向かうものを指す。平成の事例では、棺は親戚の男性たちが持つようになり、玄関から自動車まで運ぶ。近隣の新しい火葬場（浦添市伊奈武瀬のいなせ斎苑<sup>(9)</sup>）までは自動車で40分ほどかかり、30人ほどが同行した。長男がスイッチを押し、2時間弱ほどで火葬が完了するまで、持ち込んだジューシー（炊き込みご飯）のおにぎり<sup>(10)</sup>と漬け物を食べて待ったが、お酒は飲まない。そして火葬後にお骨となって家に帰り、葬儀を経てから改めて墓に移動し納骨される。

葬列（野辺送り）の際の跡取りの持ち物も変化している。遺体を墓まで運ぶ昭和の事例では、若者たちが龕に乗せて遺体を運び、跡取りは仮位牌を持って葬列に並んだ。しかし、火葬導入後の平成の事例では、葬儀の後の納骨の際には、跡取り（故人の長男）が骨壺を持ち、さらにその長男（故人の孫）が位牌を持って葬列に並んでいる。これらの点は変化したが、昭和でも平成でも死亡の翌日には墓への納骨まで済まされている点は同じである。

#### ⑤帰宅とその後

遺体や遺骨を墓に納めてから帰宅する際に、後ろを振り返らないように、また、同じ道を通らないようにすることは昭和でも平成でも言われているが、平成の事例として挙げた中城村屋宜の場合、墓と集落が近いので、別の道を通りようがなく、特に気にされていない。

昭和の事例では家から墓まで若者たちに龕を運ばせたので、彼らや手伝ってくれた近所の人たちにジューシー（炊き込みご飯）やおつゆをふるまう機会があったが、平成の事例では特に食事の場は設けられていない。また、昭和も平成も、葬式の間でのお酒は清めに撒かれることはあっても、飲むことはない。

#### ⑥葬式当日から忌明けまで

昭和も平成も、葬式後から7日ごとに法事がある。初七日（＝ショナンカ）以降、14日目（＝

タナンカ), 21日目 (=ミナンカ), 28日目 (=ユナンカ), 35日目 (=イチナンカ・ゴナンカ), 42日目 (=ムナンカ)と続いて, 49日目 (=シジュウクニチ)に区切りをつける。平成の事例は僧侶を呼んで読経してもらったが, 昭和の事例では親戚や近隣で長老と目される人が来て仏壇を拜むだけであった。このように年長者がこうした役割を果たしていた。初七日から四十九日の間, 基本的には家族のみで墓参りを行うが, 特に近い関係の人が来ることもある<sup>(11)</sup>。

四十九日餅は昭和の頃は餅米を蒸して杵でついて自分たちで作っていたが, 最近は葬儀社に注文している。

### ⑦年忌供養と弔い上げ

年忌供養も行われているが, 火葬導入前, それにもまして重要だったのは, 洗骨である。昭和の事例として挙げている北浜の仲松家では, 葬式をあげて墓に納めてから1~2年ほど後に, 故人の妹が亡くなってまた墓を開けることになったので, その機会に洗骨をした。このように, 次の死者が出て墓の扉を開ける際に, 前の遺体の洗骨が行われた。墓の扉はなるべく開かない方がよいからである。また, 分家して墓を建ててから三十三年間, その家から誰も死者を出さずに墓を開けることがなかった場合, 盛大に墓の祝いをする<sup>(12)</sup>。

昭和も平成も, 三十三年忌を供養の区切りとする。このとき魂は天に昇るといい, ごちそうを用意して祝う。

## (2) 葬儀社の関与

以上, 資料紹介として掲載した中城村の屋取集落における昭和と平成の葬送の調査票をもとに, 特徴的な点をまとめた。このうち平成の事例の方から, 葬儀社(葬祭業者)が関与し, 人々もそれに頼っている場面を改めてまとめてみよう。

葬儀社の関与について, 業者は復帰(1972年)以降にできた職業とのことで本稿の昭和の事例(1959年)には一切関わっていない。平成の事例の調査票の範囲内で, 葬儀社が関与するのは次の場面である。

- ・死亡当日, 葬儀社が棺をはじめ祭壇・葬具(仮位牌も)を準備。
- ・死亡当日, 葬儀社が死者の衣服(頭の三角の飾り)を整え, 入棺。
- ・葬儀時, 参列者へのまんじゅう, お茶, タオルなど全て葬儀社が準備。
- ・葬儀翌日, 葬儀社が祭壇を小さいものに替える。
- ・僧侶の読経はオプションとして葬儀社に注文。
- ・火葬場で骨壺を葬儀社が準備。
- ・四十九日, 花を葬儀社が片付ける。
- ・四十九日餅を葬儀社が準備。

このうち, 葬儀などに用いるものは棺・祭壇(葬儀時・葬儀後)・葬具各種・骨壺, 参列者などに配布するものはまんじゅう・お茶・タオル・四十九日餅で, 入棺や祭壇・花の片付けも葬儀社が

行う。昭和の事例では、棺や葬具は近隣の人の手伝いで準備し、配布するものは四十九日餅くらいでそれも自分たちでついていた。しかし葬儀社の関与後はそれらを購入するようになり、参列者にも葬儀社から購入したまんじゅう・お茶・タオルを返礼として渡すようになった。

僧侶による読経および戒名も、葬儀社のオプションとして認識されており、遺族が必要ないと感じれば省略される。寺檀関係がないため、葬儀社が仲介した僧侶が来て読経したものの、どの宗派の僧

侶だったかは特に把握されていなかった。本稿の調査の時に、そう言えばせっかく付けてもらった戒名をどこにしまい込んだかわからないと喪主夫婦が気付いて戸惑っていた。沖縄の位牌には生前の名前が記されるため、戒名は葬儀の際に用いられるのみで、特に必要性のないものである。そのため戒名がわからなくなっていることの戸惑いも、宗教的・供養的なものではなく、せっかく追加料金を払ったのにというたぐいのものである。

表1は、平成の事例の仲真家の喪主夫婦がまとめた、父母の葬祭時の費用である。平成19年10月19日に父が亡くなってから1ヶ月後の11月12日に母も亡くなったため、合わせてまとめられている。<sup>(13)</sup> 告別式は父母とも百数十万円かかっている。以降、支出額を見ると四十九日、次に初七日がやはりお金がかかる。このほか第三と第五の7日の法要、つまり奇数回の法要（初七日、第三、第五、四十九日）の方が偶数回（第二、第四、第六）より支出額が多いという傾向がある。喪主夫婦によると、支出の変動は参列者や焼香に来た人へ渡すお礼の品の数によるもので、つまり奇数回の法要に多くの人が訪れることがこの金額から見て取れる。

表1 葬式関係経費

法事	父	母	父母計
告別式	1,438,253	1,236,776	2,675,029
初七日	106,122	84,837	190,959
第二 七日	29,886	20,253	50,139
第三 七日	49,524	25,684	75,208
第四 七日	22,458	23,814	46,272
第五 七日	85,407	82,019	167,426
第六 七日	30,801	21,960	52,761
四十九日	394,709	97,317	492,026
合計	2,157,160	1,592,660	3,749,820

### (3) 南風原の事例との比較

前回の調査対象地・南風原町の喜屋武について、先行研究や筆者による追跡調査をもとに、中城の事例と若干の比較・対照を試み、特徴的な部分をまとめてみたい。

喜屋武では、戦後の昭和23（1948）年に龕を作成し直している。はじめの頃は村屋（勝連門中墓の入口付近）に保管し、後に龕屋を仕立てた〔南風原町字喜屋武 1985〕。作成するまでは、隣接する本部という字から借りていた。龕に遺体を乗せて運ぶのは、親戚以外の、字の若い男性で、頼まれれば断ってはいけない仕事だった。ただし、奥さんが妊娠している場合は頼む側で除外した。なお、字の中央に位置する「トゥン」「ナゴ（名護）」と呼ばれる地域の守り神の前の道は避けて通った。火葬導入後、龕は使用されなくなり、またシロアリに食われたため昭和39（1964）年に焼却された〔南風原町字喜屋武 1985、赤嶺 2002〕。

昭和33（1958）年、喜屋武の最初の火葬が行われた。最初の火葬者は野原廣吉氏で、本人の遺言によるものである。この時の火葬場は4kmほどの位置にある真玉橋付近の南部地区の火葬場で

行われた。既述の中城村北浜の昭和の事例（1959年）ではまだ火葬導入前だったので、那覇などの都市部や公設の火葬場から近い南風原町と、やや離れた中城村の火葬導入の差が確認できる。

葬送の過程における火葬について見てみると、喜屋武の平成9年の事例報告〔赤嶺 2000〕でも中城村の平成の事例と同様、死亡（午前1時）の当日に通夜を済ませ、翌日に出棺・火葬してから、葬儀告別式が行われ、その日のうちに墓に納骨されている。

昨今の南風原町ではJ Aの葬祭業者に依頼することが多い。葬祭ホールの利用者はまだほとんどおらず、自宅で行っているのだが、車で10分ほどの所にホールができたので、今後増えることが予想されている。ボンサン（僧侶）へは各自が依頼する（主に3kmほどの場所にある万福寺）。その点が葬祭業者のオプションとして認識されている中城村の事例と異なる。ただし寺檀関係はないので、依頼はその都度判断する。出棺時と納骨時の読経が主で、戒名は必ず付けるものではなく、また付けたとしても位牌に記されるのは俗名である。

南風原町（字津嘉山）の事例から家屋の構造と使用方法を分析した多良間利絵子によると、昭和5（1930）年の南風原での葬式における一番座（ウフグイ。床の間のある部屋）と二番座（ナカメー。ブツダンのある部屋）の利用法は、向かって右側の一番座に男性（親族および弔問客）、ブツダンのある二番座に女性（親族および弔問客）が座っていた〔多良間 2004〕。本稿の提示した中城村の調査票では、昭和の事例でも平成の事例でもブツダンのある部屋（二番座）だけを葬式時に用いていた点異なるが、向かって右側（東）に男性、左側（西）に女性という座敷の利用の構図（多良間の言う男女の東西対立）は共通している。

## ④……………自動車の利用—復帰前の新聞記事と統計資料

### （1）新聞記事・自伝資料

以下では、戦後の沖縄における自動車社会化の進展と、自動車での移動をともなう今日の祖先祭祀行事の実例を論述し、自動車社会化という変化について考えていく。まず新聞記事および自伝資料から、戦後から復帰前における葬送に関連しての自動車利用の様子を見てみよう。<sup>(14)</sup>

「埋葬を廃した／喜如嘉部落の舊習打破」（琉球新報 1952年6月2日3面）は、大宜味村喜如嘉区が埋葬を廃したことを伝える記事である。かねてより洗骨・埋葬・式などの葬儀の冗費節約のため、婦人会を中心に火葬場設置を提唱してきたことに対し、旧慣を重んじる年寄りたちからは「生きているときに焼かれるのさえ嫌なものであるのに死んだあとで焼かれてはたまらない」、「火葬に要する薪はトラックに一杯もいるからかえつて不経済」といった反対の声が寄せられていた。死後に焼かれることに抵抗する声は、鹿児島県の与論島で火葬が導入されたときの調査でも聞かれた〔武井 2004, 2008〕。また喜如嘉では、費用の面からも反対意見が出されていたのだが、同年1月2日に初めて火葬が行われた結果、「薪は百円位ですみ、洗骨の必要もなくなる」と、許容範囲内の経済負担で、速やかに骨化が済ませられ、数年後に改めて行われる洗骨も省略できることが受け入れられ、さらに「火葬の成功に伴って死装を簡単なさらしの白衣装に統一」できることになり、「葬式に見栄をはらなくてすむようになった」と報じられている。既述した南風原町字喜屋武での火葬



のはじまりは1958年なので、那覇からも遠い本島北部の字にて住民主導で導入されたことの先取性は著しいものである。

このほか、従来墓所まで遺体を担ぐのに用いられていたガン（龕）が埋葬の廃止とともに「旧習慣のガンとばかり放棄されており、これに変わってリヤカーの霊きゆう車が利用されている」と同記事にはあり、火葬場までの遺体運搬にはリヤカーが用いられた。墓所まで着く間、遺体を乗せた龕は地面に付けてはならず、遠い墓所に運ぶ場合などは休憩もできない重労働だったという話は各地で聞かれるのだが、それが地面に付いたままのリヤカーに変わったというこの事例は、遺体処理だけでなく、遺体運搬時の禁忌まで変容したことを示すものである。この「沖縄県で初めて公設の火葬場が設置された」という大宜味村喜如嘉の事例については、尾崎彩子が設置に至る経緯や設置後の火葬第1号<sup>(15)</sup>の詳細、洗骨や火葬そして火葬骨に対する人々の意識について論じている〔尾崎1996〕。

6年後の「旧十六日も戦後派」（琉球新報1958年3月7日5面）は、旧1月16日の墓参の記事で「タクシーが草深い道を走り、高級車が墓前に横づけするというシーンはやはり戦後派らしい風景」と報じられている。一方同年の記事に「五名が重軽傷 清明祭の帰りに輪禍」（琉球新報1958年4月13日夕刊3面）という那覇市壺屋の人が読谷へ清明祭に行った帰りの事故が報じられている。「高級車」と記され「戦後派らしい風景」と報じられ、事故の記事ではあるが那覇から読谷まで自動車で清明祭の墓参りに行っていたことが伝えられるなど、自動車で移動しての墓参があり得ることになってきた当時の様子が記事からうかがえる。

これが1970年代初頭に入ると、「本部町に葬儀車／前原さん私財で贈る」（琉球新報1971年2月23日7面）の記事で、本部町では「十年前に火葬場ができたが、これまで霊柩車がないため自家用のピックアップやワーゴン車を利用。時たま那覇あたりから霊柩車がくると、『本部町でも一台は必要だ』などと、町民の間でささやかれていた」という状況にまで達している。そして、町長の知人が配達用に使っていた「外車のワーゴン」を「黒にぬりかえて『本部町』の文字を白抜きにして」提供したことが報じられている。

同時期の、戦後復帰前の状況、そして車社会への先見的対応について記した親泊元信氏の自伝〔親泊1990〕を参照しよう。復帰前の頃、親泊氏は木氏門中の代表として「沖縄ではやがて自動車時代に突入する見通しであり、墓の前の土地を手に入れ駐車場を作り、門中の葬式や拝み等も自動車で乗り入れてやる」〔同182頁〕ことを目指した。「門中の墓地の所まで直接車がはいれるようにすることは、いわゆる車時代への対処として必要なことであり、このことは門中の方々の要望ともなっていた」。土地購入のための代金は門中の人々に「人頭割にした割当金」や寄付金を募り、さらにハワイやペルーなどへ移住した門中の親戚を訪問し、事情を理解してもらった上で寄付を募った。親泊元信氏はこの計画のため、まず駐車場となる墓地の前の土地（246坪）について所有者を説得して購入を済ませた。しかし、墓地まで車を乗り入れる通路（道幅3m）については、その用地で農業をしている所有者との交渉が進まなかったり、道の通し方によっては自分たちの墓所や隣接する他の門中の墓所の風水が壊れると反対されたりと、困難を極めた。結局、測量を経て周辺の土地所有者から最小限の土地を譲ってもらうルートを確認し、車道の開通は実現した。

## (2) 自家用乗用の自動車台数の統計資料

表2は、統計資料—『琉球警察統計書』[1963年版, 1967年版, 1971年版], 『沖縄県交通白書』[昭和58年版]—をもとに、戦後間もなくから復帰前にかけての「自家用」かつ「乗用」として登録された自動車（普通自動車および小型四輪・小型三輪）の台数、および県下保有車両数・免許保有者数を示したものである。なお自家用以外の区分には、「営業用」、「外人用」、「官庁用」があり、たとえば1963年『琉球警察統計書』の記録では自家用78%, 営業用12%, 外人用8%, 官庁用2%という割合となっている。表では県人口の推移[『沖縄県人口の推移』[昭和49年]]も提示した。これらから、乗用自動車数はずっと増加傾向が続いたこと、1960年代から小型四輪が著しく増加する一方で普通自動車数の台数は1960年代初頭から減退したこと、免許保有者数の増加傾向は人口増加傾向と比べて著しかったことが明らかとなる。

この統計から、先に引用した記事の当時の状況を見てみよう。大宜味村喜如嘉でリヤカーが導入

表2 戦後～復帰 沖縄の自家用乗用自動車台数

年	自家用の乗用自動車数				県下保有 車両数	免許 保有者数	県人口	
	普通 自動車	小型 四輪	小型 三輪	合計				
1949	-	-	-	-	58		571,846	
1950	-	-	-	-	1,128		698,827	国勢調査
1951	-	-	-	-	2,297	2,744	-	
1952	-	-	-	-	2,780	9,817	754,900	
1953	-	-	-	-	3,774	12,365	769,300	
1954	184	170	13	367	4,448	13,870	787,700	
1955	335	206	11	552	5,688	16,083	801,065	国勢調査
1956	698	252	9	959	7,820	19,400	820,000	推計
1957	1,206	292	8	1,506	8,840	20,245	835,000	推計
1958	1,804	633	6	2,443	10,986	22,377	854,000	推計
1959	2,120	817	7	2,944	12,067	26,194	873,000	推計
1960	2,430	1,322	7	3,759	14,412	33,566	883,122	国勢調査
1961	2,487	2,066	5	4,558	17,589	42,559	894,000	推計
1962	2,568	3,344	4	5,916	22,558	49,925	906,000	推計
1963	2,570	5,678	4	8,252	28,843	62,411	919,000	推計
1964	2,102	6,687	3	8,792	32,521	78,082	927,000	推計
1965	1,816	11,164	3	12,983	41,427	92,143	934,176	国勢調査
1966	1,459	17,305	3	18,767	54,296	112,459	942,000	推計
1967	1,309	25,170	3	26,482	70,290	128,284	949,000	推計
1968	1,432	31,803	3	33,238	84,428	145,431	956,000	推計
1969	1,467	37,055	3	38,525	96,368	162,443	955,000	推計
1970	1,641	44,129	3	45,773	114,112	181,303	945,111	国勢調査
1971	2,124	53,735	3	55,862	137,949	200,989	938,951	

『琉球警察統計書』(1963年版, 1967年版, 1971年版), 『沖縄県交通白書』(昭和58年版),  
『沖縄県人口の推移(明治36年以降)』(昭和49年)を参考に筆者作成。

された1952年（「埋葬を廃した／喜如嘉部落の舊慣打破」）当時の沖縄の県下保有車両数は自家用・営業用・外人用・官庁用などすべて車種を含めて2,780台のみであり、自動車はまだ珍しかった。しかし霊柩車（先に引用した記事内では「霊きゆう車」）という言葉は用いられていたようである。1958年（「旧十六日も戦後派」など）当時の台数は、自家用の乗用自動車台数だけで2,443台に達し、県下保有車両数は10,000台を超えたものの、推定人口854,000人（免許保有者数22,377人）に対してはまだ台数は少なかった。リヤカー霊柩車の導入が記事になった1952年、清明祭に車で乗り付けることが記事になった1958年を経て、1971年には霊柩車の代用として自家用車が利用されるようになり、さらに本島北部の本部町でも町有の霊柩車が必要なものだと考えられるに至っている。

その1971年には、人口938,951人に対し、自家用の乗用自動車数は50,000台（県下保有車両数は130,000台）を超えている。1971年までの過去10年間で人口は90万人台で推移しているが、自家用の乗用自動車数は5,000台から50,000台と10倍になっている。

ここで、沖縄県下の自動車1台あたりの人数を算出（県人口÷県下保有車両数）してみると、1952年には1台あたり271.5人だったが、1958年には77.7人、そして1971年には1台あたり6.8人である。県下保有車両数は自家用・営業用・外人用・官庁用の総数だが、県民にとって自動車に触れる機会は急速に増えてきたことが読み取れる。次に、自家用の乗用自動車1台あたりで算出してみると、1958年の349.6人から、1971年には16.8人と、やはり急速に自動車が身近なものになっていた状況がわかる。<sup>(16)</sup>戦後～日本復帰前のアメリカ統治下において、沖縄の自動車社会化は以上のよう<sup>(17)</sup>に進んでいた。

### (3) 中城村屋宜での聞き書き

戦前の沖縄本島南部には首里・那覇を中心に鉄道網が敷かれていた。那覇—与那原間の与那原線（1914～1945年）、古波蔵—嘉手納間の嘉手納線（1922～1945年）、国場—糸満間の糸満線（1922～1945年）の3線の汽車（蒸気・内燃）があった。また、与那原から泡瀬までは沖縄軌道（人力・馬力。1914～1945年）もあった。しかしこれらはいずれも沖縄戦の戦災で失われた〔今尾2009〕。

戦前の沖縄本島中南部の東海岸の交通網は、首里から与那原まで与那原線、与那原から泡瀬までは沖縄軌道、そして与那原から泡瀬にはボンネットバスも走っていた。しかし中城村からは、多くの人が首里までは歩いて出かけていた。

戦前の鉄道はいずれも戦災で失われ復旧しなかったが、戦後にはバス網が整備された。戦後の中城村でいちばんはじめに車を買ったという屋宜の仲真家の男性（1932年生）は、バスの長期ストがあった昭和40（1965）年頃に、中古の日産プリンスを600ドルで購入した。新車だと1,200ドルで、この額は20坪の家が買えたほどだという。その妻（1931年生）も昭和44（1969）年に「車持たんと不自由感じる」と免許を取得した。この頃（1960年代後半）は先述した統計資料でも、自家用の乗用自動車台数も免許保有者数も大幅に増加し始めた時期と一致する。多くの家庭で自動車が必要とされ、かつ手に入れられるようになった時代の到来である。

## ⑤…………自動車での移動をとまなう祖先祭祀行事の実例

続いて、筆者の最近の調査をもとに、今日の祖先祭祀が自動車にいかにかかっているかを描き出してみたい。葬送においては、前述のように、喪家と火葬場を車で往復して遺体を火葬骨にすることが当たり前となっているが、今日の沖縄の祖先祭祀（墓参りなど）の場においても自動車が不可欠なものとなっていることが注目される。以下では、中城村北浜の仲松家の清明祭（2005年4月調査）とウマチー（2008年7月調査）、中城村屋宜の仲真家のウマチー（2009年6月調査）、南風原町喜屋武の清明祭（2011年4月調査）から、祖先祭祀における自動車利用の実態を提示する。

### （1）中城村北浜の仲松家の清明祭—中城村から那覇市首里方面へ

まず、中城村北浜の仲松姓の家々の清明祭の事例を提示する。調査日時は2005年4月10日（日曜）および同月17日（日曜）である。

仲松姓の家々は士族系門中の洪氏に属し、清明祭の墓参りは、那覇市内にある洪氏門中の大宗（我如古家）の墓から始まり、同日に小宗（琉球王府時代に大宗家から独立した仲松家全体の祖先）の墓参り、そして「高仲松」と称する、現在の北浜の仲松姓たちにつながる先祖の墓に参る。簡単に言うと、大宗家と、そこから分家した小宗家と、そこから分家した高仲松というように、系譜関係を現代の自分たちまで下るように墓をめぐるのである。そして、翌週の日曜日に、今度は中城村近辺にある首里仲松（屋号。首里から中城村に移住してきた家で現在の北浜仲松全体の総本家に当たる）家の墓や、自身の家の墓などをめぐる。このように、4月の日曜日には数週間にわたって、系譜関係をふまえつつ、墓参りを繰り返すのである。特に清明の入り後の最初の日曜日には最も上とされる祖先の墓に参り、これを神御清明（カミウシーミー）と称する。

では、北浜の仲松姓を例に、自動車での移動をとまなう墓参りの事例を見てみよう。まずは2005年4月10日（日曜）の神御清明からである（写真3～16、地図1（国土地理院地図5万分の1より作成））。

11時27分、自動車数台を乗り合わせて中城村北浜を出発。

12時過ぎ頃、那覇市内の大宗の墓に北浜の仲松姓の家々が墓前に集合。墓前には重箱（餅、おにぎり、卵焼き、蒟蒻、かまぼこ、豚肉、昆布、ごぼう、厚揚げ豆腐）、果物、泡盛が供えられる。また墓に向かって右側をヒジャリノカミ<sup>(18)</sup>と称し、そこにも線香を上げ泡盛をかける。準備が整い次第、揃って線香をあげて墓を拝み、自動車での墓へ移動。

13時前、小宗の墓（洪氏仲松門中之墓。洪氏門中内でも仲松・仲尾次姓の家々の祖）に到着。このときには筆者が同行した北浜の仲松の先に他の洪氏門中の一団が到着して墓参りを行っていたので暫く墓前があくのを待つ。このように洪氏の大宗家・小宗家の墓参りは、門中の分節集団ごとにめいめい集まって行っており、たとえば沖縄県内各地の仲松姓の門中が時間を合わせて集合するということはしていない。

13時過ぎに、墓前に重箱を供え線香をあげ、ヒジャリノカミにも線香をあげてから、揃って小



写真3 11時27分 北浜を出発



写真4 12時00分 洪氏大宗の墓

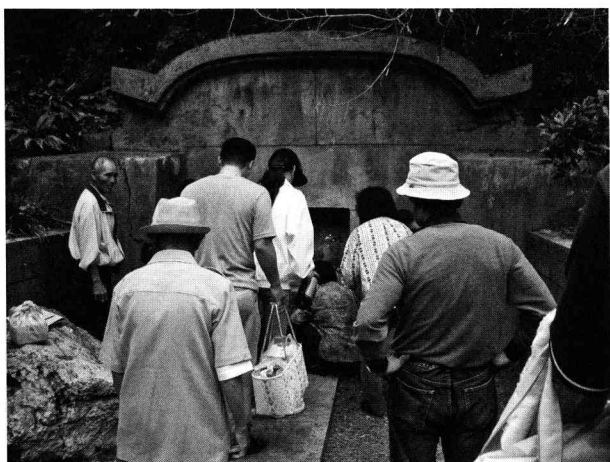


写真5 12時15分 大宗の墓前に集合



写真6 12時16分 大宗の墓前で重箱を広げる



写真7 12時22分 大宗の墓前のオガミ



写真8 12時57分 洪氏小宗の墓碑

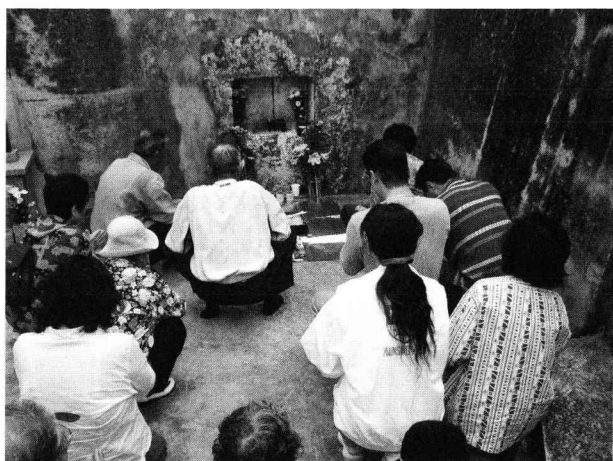


写真9 13時09分 小宗の墓前のオガミ



写真10 13時43分 墓前にシートを広げる



写真11 13時50分 高仲松の墓前のオガミ

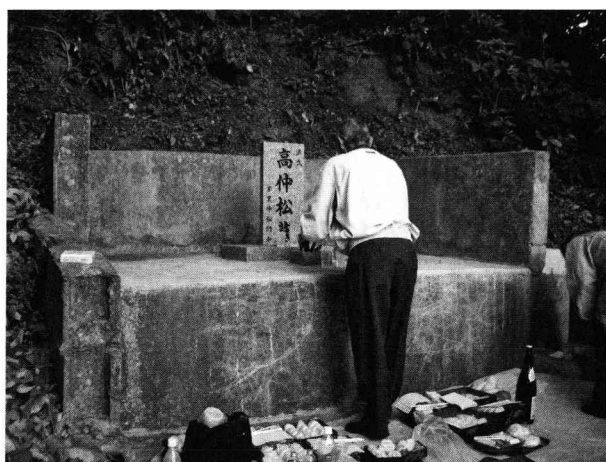


写真12 13時55分 線香を供える



写真13 13時56分 再度、オガミ



写真14 13時59分 重箱から取り分ける

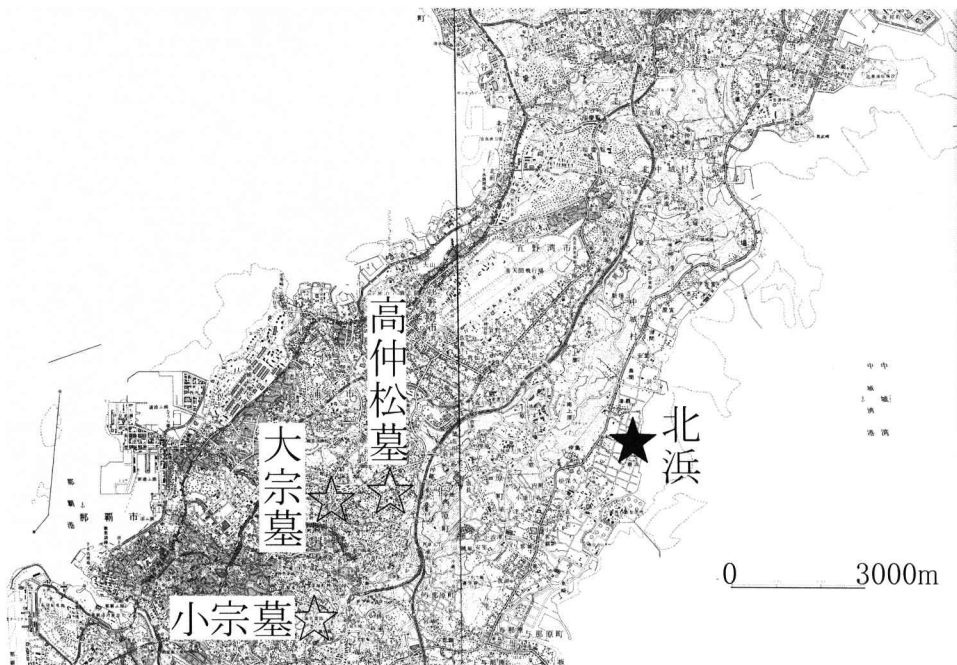




写真 15 14 時 04 分 墓前で食事



写真 16 15 時 10 分 帰り際にオガミ



地図 1 中城村北浜の洪氏仲松家の清明祭

宗の墓を拝む。そのあとすぐにまた自動車に乗って移動する。

13時50分、高仲松の墓前に集合。重箱・線香を供え、ヒジャリノカミにも線香をあげ、揃って墓を拝む。

14時頃から、これまで3カ所の墓前に供えてきた重箱の中身を参加者全員で取り分けて、墓前で揃って食事をする。沖縄の墓参りは親戚全員のピクニックのようなものとよく説明される通りの光景である。年に1度、北浜の仲松姓の家々が連れだって墓前に集合し、重箱の中身を親戚や先祖と分け合って歓談する。この機会に門中の総会が開かれ、報告などが行われる。

15時頃、1時間ほど食事をしてからまた車に乗り合わせて現地解散しめいめい帰宅し、4月の第1日曜日の神御清明を終える。

翌週の日曜日には中城村内の墓所へ墓参りに行く。屋号・四男加那仲松（葬送の調査票の昭和の事例の話者でもある）の墓参りに同行させてもらった（写真17～24）。

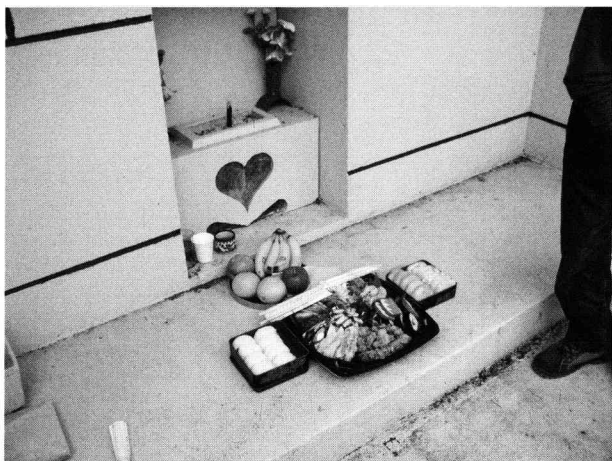


写真17 13時51分 お供え物



写真18 13時52分 ウチカビ



写真19 13時52分 オガミ

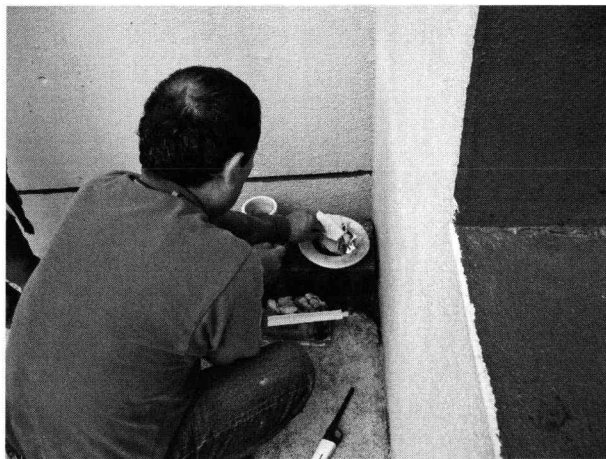


写真20 13時53分 ヒジャリノカミ



13時50分ごろ、重箱（餅・おにぎり）、果物、泡盛、スーパーで購入したオードブルを持って、自分の家の墓に向かう。墓に向かって左側でウチカビ（紙銭）を燃やし泡盛をかけ、続いて向かって右側脇のヒジャリノカミにも重箱の中身を供えウチカビを燃やしてから家族揃って墓を拝み、重箱の中身を広げて食事をする。祖先と共に共食することが目的で、この時は食事と言っても数分で済ませた。

14時30分、本家に当たる屋号・首里仲松家の墓に顔を出し、既に食事を始めていた首里仲松家の人々と食事を共にし、15時過ぎ頃にそこを辞した。

以上が、2週にわたって日曜日の午後に行われた墓参りの1例である。特に1週目の神御清明には、中城村から那覇市内の3ヵ所の墓所を回るため、自動車が不可欠である。というよりも、自動車での移動を大前提に親戚一同の参加が可能となっている。自動車社会化のおかげで、体力の無い世代・年少者や年配者—も行事に参加できるようになった事例である。



写真21 13時55分 墓前で食事



写真22 14時14分 最後にオガミ

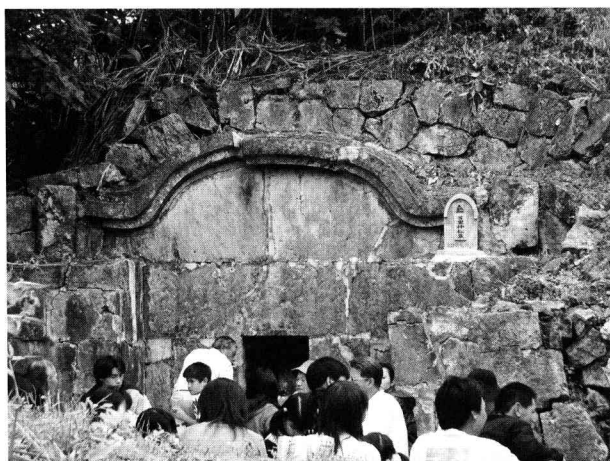


写真23 14時30分 「首里仲松」の墓前で食事



写真24 墓の左側、まだ墓を建てない分家の墓

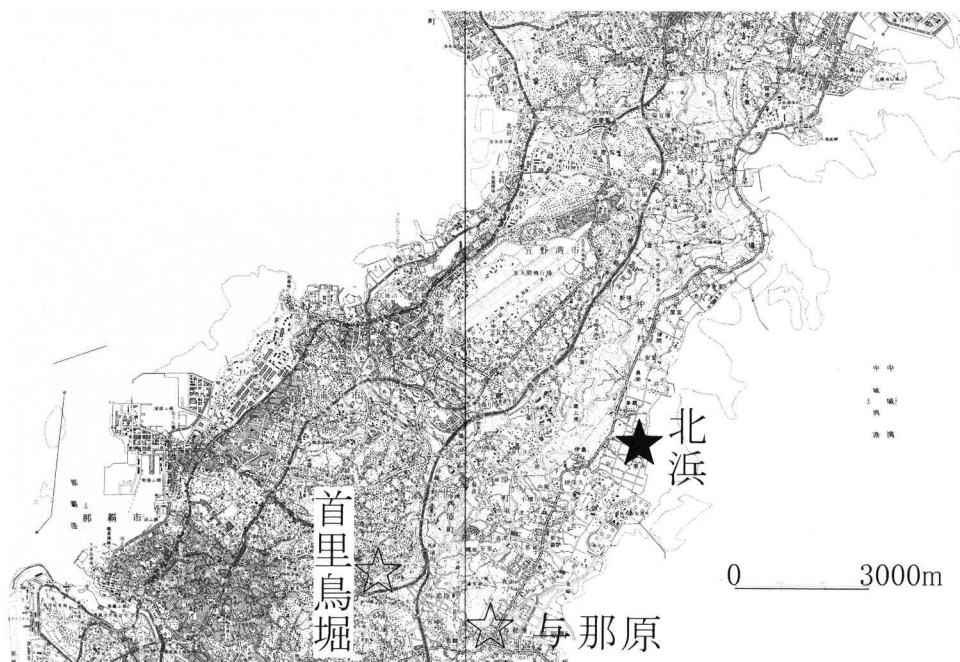
## (2) 中城村北浜の仲松家のウマチー—中城村から那覇市首里・与那原へ

続いて同じ門中の集団が行う、ウマチー（御祭）の事例を提示する。調査は2008年7月17日（火曜：旧暦6月15日の六月ウマチー）に行った。この祭祀の対象は、大宗家および小宗家のブツダン（カミダナ）である。中城村から与那原町の大宗家や那覇市の小宗家へと移動するため、自動車社会化によって祭祀へ向かうことが容易になった反面、前項の清明祭と異なり一族総出ではなく祭祀に熱心な一部の年配者が参加し続け、世代交代が行われなくなった事例である（写真25～30、地図2（国土地理院地図5万分の1より作成））。

4月の清明祭は北浜から大勢の参加者が出向いたが、ウマチーの際に門中の大宗家・小宗家を訪ねるのは少数で、しかも連れだって行かずに、個々人で訪問する。

10時20分に首里城に近い那覇市首里鳥堀町の小宗家を訪問する。この家は洪氏門中内でも仲松および仲尾次を苗字とする家々共通の祖の直系に当たる。この家のブツダンは、小宗の初代以降枝分かれした門中を対象とするものと、小宗家直系で当代の世帯につながるものとに分かれている。ウマチーの行事で祭祀の対象となるのは前者である。そこに祀られている香炉に線香を供え、ハナグミ（花米）と呼ばれる米を持ち帰る。小宗家の家族やそこに居合わせた他の地域に住む仲松姓の人々としばし談笑し情報交換（たとえば個人の動向や、系図の作成状況など）を行う。小宗家のブツダンを拝んだら、次に系図をさかのぼって大宗家のブツダンを拝みに移動する。

12時頃、首里を離れ島尻郡与那原町に住んでいる大宗家に到着する。大宗家のブツダンは左側に代々の位牌が安置されているが、今回の祭祀対象はその右側にある香炉で、同様に線香を供え、ハナグミを持ち帰る。



地図2 中城村北浜の洪氏仲松家のウマチー



写真 25 10 時 20 分 洪氏小宗のブツダン



写真 26 洪氏小宗の香炉



写真 27 12 時 16 分 洪氏大宗家



写真 28 洪氏大宗家のブツダン

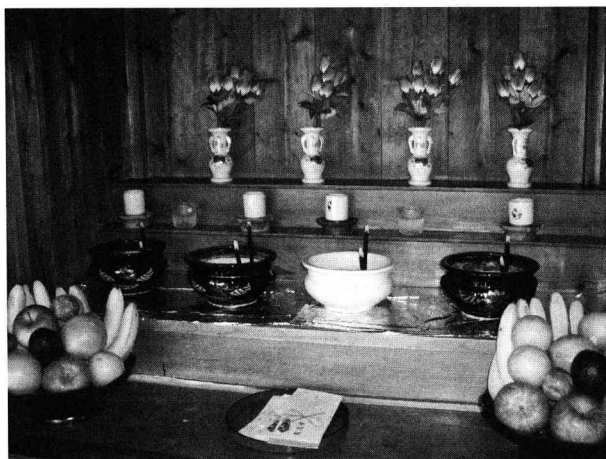


写真 29 洪氏大宗家の香炉

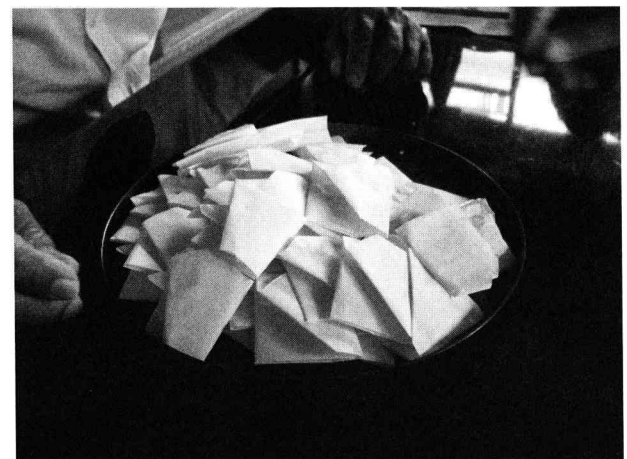


写真 30 ハナグミ

### (3) 中城村屋宜の仲真家のウマチー—中城村から那覇市・沖縄市へ

もう一つ、同じ中城村内の屋宜に住む、別の門中を事例に、移動をともなう祖先祭祀についてみてみよう。対象は、馬氏門中の仲真姓の人々で2009年6月7日（日曜：旧暦5月15日の五月ウマチー）に調査を行った（写真31～37、地図3（国土地理院地図5万分の1より作成））。

この事例では、祭祀の対象となる大宗家は那覇市天久に、小宗家は沖縄市泡瀬に住んでいる。両市は調査対象者の住所である中城村を挟んで全く反対の方向である。歩いて行っていた頃は、首里



地図3 中城村屋宜の馬氏仲真家のウマチー



写真31 14時26分 馬氏大宗家のウマチー



写真32 馬氏大宗家のブツダン



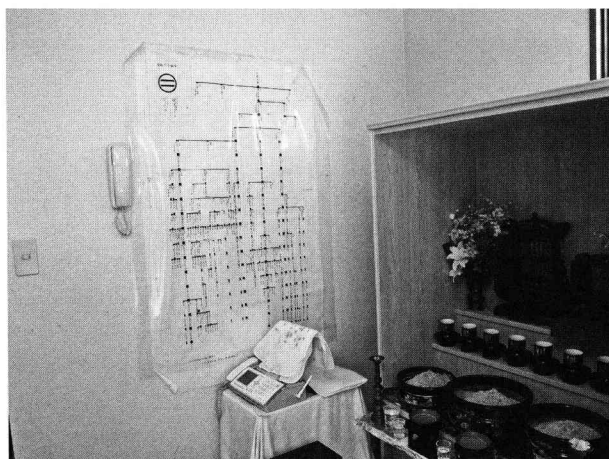


写真 33 壁に貼られた馬氏の家系図

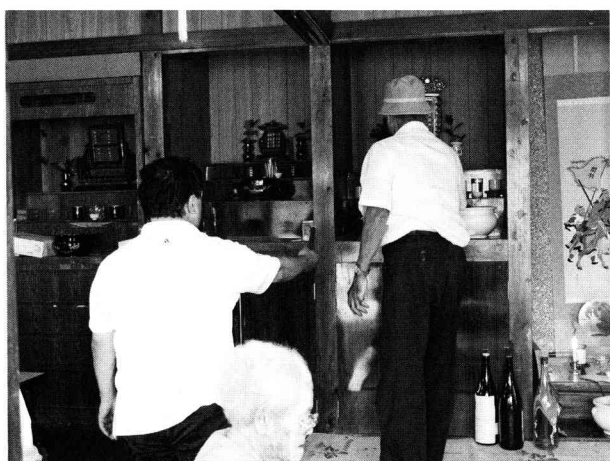


写真 34 15 時 40 分 馬氏小宗家のウマチー



写真 35 馬氏小宗家のブツダン



写真 36 「大祖元」仲松家先祖代々



写真 37 馬氏小宗家の香炉

(那覇)に行く人、泡瀬に行く人と代表を決めて行っていたが、自動車の時代になって両方行くようになった。自動車の利用のおかげで午後の数時間足らずで、年寄りたちだけでも、2カ所の祭祀が済ませられるようになった事例である。

13時30分、車で出発。近所の同じ門中の人と乗り合わせていく。毎年同じ日付(旧暦)・同じ時刻なので、事前に時間の確認もせずに集合できる。日曜なので孫は野球の試合。

14時15分、那覇市天久のコンビニで数台の自動車が集合。

14時25分、馬氏大宗家のブツダンを拝み、香炉に線香を供える。また、ブツダンの脇の壁に貼られた家系図を見て、自分の属する門中の集団がどのように大宗家から分かれたか、分節を確認する。これはつまり、自分自身と大宗の初代である元祖がどうつながるかの確認である。

14時45分に大宗家を辞して小宗家に移動する(途中、渋滞に巻き込まれたが、この渋滞はウマチーのための自動車移動が大きな原因である)。

15時45分、沖縄市泡瀬の仲真家の小宗家のブツダンを拝む。この家は馬氏門中のうち仲真姓の家々の祖である。この日の拝みの対象は「大祖元／仲真家先祖代々之霊位」と記された位牌と香炉である。

16時00分に辞して帰路についた。

以上、中城村に居住する士族系門中を対象に、大宗家と小宗家の墓参りを行うセーメーと、ブツダンを拝みに出向くウマチーの事例を挙げて、自動車での移動が可能になったおかげでこれらが容易に果たされていることが明らかになった。

#### (4) 南風原町喜屋武の門中墓の清明祭—南風原町一帯の門中墓

最後に、門中墓地帯においても、やはり自動車を利用して一家総出のセーメー(清明祭)墓参りが行われている事例を見てみよう。調査は2011年4月10日(日曜)に、南風原喜屋武の一家・山口門中(糸満ビチ)の赤嶺家を対象に行った(写真38～47、地図4(国土地理院地図1万分の1より作成))。

父系関係で結ばれた複数の家族からなる門中によって墓が共有される門中墓だが、清明祭の墓参りにその関係者全員が一堂に会するといったことはなく、喜屋武では家族や近い親戚(チュチョーデー)ごとに行われている。ただし、どの日取りで清明祭をするかは南風原町が決め、「町清明祭」として通知される。それぞれの墓を利用する家族が代わる代わる墓参りに来るので、墓前でゆっくり食事をとることはできない。ただし門中によっては共同で準備した重箱を分けることもあるという。

筆者が同行したのは2兄弟とその家族(計10人)での清明祭の墓参りだった(例年は3兄弟の家族で出向くが、この年は長男のみ用事のため午前中に済ませてしまった)。清明の入りの日(4月5日火曜日)には、門中の年配者・長老たちが拝みに出向いているが、その後の最初の日曜日に各家庭がそれぞれ墓参りを行う。



地図 4 南風原町喜屋武の山口門中の清明祭



写真 38 15 時 05 分 南風原の清明祭「トーシー墓」



写真 39 15 時 05 分 南風原の清明祭「トーシー墓」



写真 40 15 時 24 分 南風原の清明祭「アジシー墓」

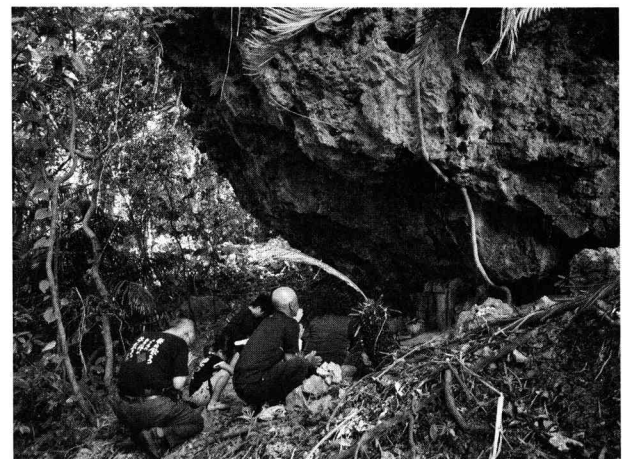


写真 41 15 時 30 分 南風原の清明祭「アジシー墓」の裏手



写真42 15時30分 南風原の清明祭「アジシー墓」の裏手



写真43 15時40分 南風原の清明祭「按司御墓」(文化財)



写真44 15時40分 南風原の清明祭「按司御墓」(文化財)



写真45 15時40分 南風原の清明祭「按司御墓」(文化財)



写真46 15時45分 南風原町の慰霊塔



写真47 15時45分 南風原町の戦没者碑



15時05分、自宅から徒歩で南風平原のトーシー（当世）墓に向かい墓参りをする。当世墓とは、今の世（世代）も用いている墓で、面識のある上の世代も納骨されており、男性の場合はいずれ自身も死後ここに納骨される墓である。別の世帯が先に拝んでいたのでしたし順番を待ってから拝んだ。

15時24分、自動車で黄金森にあるアジシー（按司世）墓へ移動し、拝む。按司世墓とは、現在は使用されていないが、按司（かつて支配者層）の時代、つまり遠い昔に用いられていた墓の意で、門中の遠い先祖を葬るとされる。

15時30分、アジシー（按司世）墓の裏手も拝む。以前は拝んでいなかったが、骨が出てからその場所も拝み始めた。自分たちとの関係は不明であるという。

15時40分、自動車で、黄金森の北端の、南風原小・中学校近くの「按司御墓」（南風原町教育委員会の案内板も立つ）へ移動し拝む。喜屋武では本稿で同行した山口門中だけが拝んでいる。

15時45分、「按司御墓」のすぐ脇にある、南風原町の慰霊塔と戦没者碑（南風原町平和の礎。南風原町兼城765番地）に向かう。ここには南風原町民の戦没者が字ごとに刻まれており、その喜屋武のところに目を向ける。小学生の子どもたちにも戦争について話して聞かせる。

以上のように、系譜関係・血縁関係のはっきりした上の世代の人が葬られているトーシー（当世）墓から始まり、この地域に住んでいた先祖を按司の時代や戦中などに遡って確認し拝む行為を、1km四方の範囲内を自動車で移動し、1時間弱の間に行っている。実は現在、トーシー墓だけを墓参りの対象とし、それより上の墓は拝まないようにしようという意見も門中の中から出ているそうだが、一方で教育・伝承の機会として按司の墓や戦没者碑を回り続ける必要も説かれている。

なお、南風原の喜屋武などムラのウマチーは集落内の聖地（井戸や古い家などを含む）の巡回なので、ムラ内の門中ごとに徒歩で行っている。大人だけでなく幼い子どもたちも参加している。

## おわりに

本稿では、火葬の導入・葬祭業者の関与による葬送の変化―昭和と平成の事例の比較―と、自動車社会化による祖先祭祀の行事の変化―戦後から今日までの自動車社会化の進展過程―という、2種類の変化と時間軸に着目して論じてきた。

葬儀の前の火葬が当たり前となった今日では、火葬許可を得られる死後24時間後以降のどのタイミングで火葬場が利用できるかで、葬送の日程が決まる。副葬品も火葬場で燃やせるものに限るなど、火葬場の都合と事情が大きく影響している。葬祭業者の関与によって葬儀における地域社会の負担が減ったのは沖縄県も他地域と同じだが、それは喪主家の金銭的負担に現れる。告別式のほかに初七日、四十九日など奇数回の法要にお金がかかり、支出の変動は参列者や焼香に来た人へ渡すお礼の品の数によるものだった。

自動車社会化という変化もまた、葬送や祖先祭祀に大きな影響を及ぼした。通夜の後、葬儀の前に火葬場へ遺体を運ぶのにも自動車は不可欠であるし、今日の祖先祭祀の行事は自動車での移動を前提に成立している。自動車によって、体力の無い世代を含む親戚一同の参加が可能となっている

ことを明らかにするとともに、自動車社会化後の家庭の祖先祭祀に関与する世代の実態も示した。

徒歩で移動していた自動車社会化以前は、離れた墓や宗家へは体力のある若者だけが、一家や門中や地域を代表して、徒歩で1日かけて向かっていた。そうした状況に自動車社会化がもたらした変化は2通りある。1つは、自動車で移動できるようになったおかげで、体力の無い世代・年少者や年配者一も行事に参加できるようになったという変化である。そしてもう1つは、自動車で移動できるばかりに、年配者だけが行事に参加し世代交代が阻まれているという変化である。

自動車の普及のおかげで複数箇所にも距離の離れた場所にも1日で、家族・親戚一同が揃って出かけられるようになり、年配者を含めた幅広い世代の行事への参加が多く、多くの家庭や門中で実現している。このことが、子や孫とともに祖先祭祀に参加し続けたいという年配者本人たちの希望を実現させているのならば非常に良いことであり、年配者が祖先祭祀の行事の場を取りしきりつつ若い世代に行事の作法を伝えることにもつながる。しかしその一方で、自動車の移動が、行事の参加者を変化させにくくしている面があることも指摘しなければならない。家族総出での行事への参加を実現させた自動車の普及は、反面、年配者だけでの行事の参加については若者の不参加をも可能にしたのである。清明祭は日曜日に、ウマチーは旧暦2・5・6月15日（あるいはそれに近い日曜）に開催されるが、平日には若者は仕事や学校があり参加できないし、日曜の場合も若者は他の用事のために参加しづらい。そのため、若い頃に徒歩での墓参りやブツダンの拝みを経験した世代が、年を経た今もお自動車で出向いて祖先祭祀を続けているという現実もあるのである。

自動車の普及によって、かつての徒歩の時代とは異なり、若者が長距離を歩けない年配者に代わって一家・門中・地域を代表して拝みに行かずとも済む状況が生み出され、結果、祖先祭祀に熱心な年配者が若者に代わっていつまでも祭祀行事に参加し続けなければならないという状況さえ生じている。そうすると行事への参加者の若返りや世代交代が遅れるばかりか、家庭や門中によっては、年配者の引退にともなって祖先祭祀の行事が次世代に継承されないまま終焉してしまう事態も起こっている。このことがいま沖縄の祖先祭祀の現場で問題となっているのである。

最後に、葬祭業者と自動車社会化の2点それぞれについて、今後の課題を挙げてみたい。まず、本稿で挙げた事例ではまだ自宅での葬儀が続いているので、今後沖縄での葬祭ホールの利用がどのように進むかを見ていかなければならない。また墓地に関して、既存の墓地の整備事業はもちろん、最近沖縄で広まっている（従来の沖縄の墓と比べるとはるかに小ぶりの）分譲墓地の購入も見逃せない変化である。さらに自動車社会化については、主に門中ごとに企画されるバスによる聖地巡りの小旅行についても考えていきたい。たとえば中城村屋宜の馬氏仲真門中はアガリマーイ（沖縄本島南部の聖地巡拝）とナキジンマーイ（沖縄本島北部の聖地巡拝）を7年に1度しており、かつては歩き（アガリマーイは3日間、ナキジンマーイは1週間）だったが、今はバスを頼んで1日で済ませられるようになっている。

なお、本稿で引用した中城村の葬送についての昭和の事例と平成の事例の詳細は、本報告書に掲載されている資料紹介を参照していただきたい。また本稿でも言及した葬祭業者の利用に対する喪主の金銭負担については本報告書に掲載されている研究ノートで他地域の事例を用いより詳細に分析している。

註

(1)——門中墓地帯(南風原町喜屋武)における洗骨と、火葬導入後の今日について、赤嶺政信は次のように記している。「門中に死者が出ると、葬儀に先立って墓室に先に安置されている死者の棺を墓庭に出し身内とごく近い親戚によって洗骨(洗骨することをギレーユンという)が行われた。(略)完全に白骨化していない死者は現世への執着があるからだという解釈もあって、関係者は、棺を開けて白骨化を確認するまで極度の緊張感を強いられるという。火葬が普及した今日でも、先に納まっている遺骨を出して形式的に骨を洗い(拭き)その遺骨を奥に収め直すことは行われている」[赤嶺 2002]。

(2)——徒歩から自動車への移動手段の変化については、四国遍路における、いわゆる「車遍路」に関しても論じられている。坂田正顕は徒歩遍路と車遍路の体験を様々な面から比較し、たとえば前者では道中修行で、後者では霊場修行で充実感が得られるなど表層的な分化にとどまらないことを明らかにした[坂田 1999]。関三雄は交通手段・交通事情の発達にともなう車遍路の展開について電車・路線バスの利用から、マイクロバスのツアーへの参加、そしてマイカーによる少人数の仲間での遍路(さらにはヘリコプターによる空中参拝)など、その移動メディアの多様性を論じている[関 1999]。

(3)——津波高志も、奄美大島の葬送の変化を見るに当たって交通網の整備という社会変化に目配せしている。奄美大島が日本に復帰したのは1953年で、1961年に「県道の湯湾思勝名瀬線が開通し、名瀬から大和浜までバスの運行が開始された」、「それまでは名瀬と大和村を結ぶ交通手段はボンボン船しかなかった」。船で片道1時間半(冬の天気の良い日は半日かけて徒歩)の行程が、バスの開通によって30分に短縮された[津波 2012 75頁]。

(4)——この両地域の成立から現状については武井2007参照のこと。

(5)——大正14年に、沖縄県庁学務課の島袋源一郎が各町村にある尋常高等小学校などの学校長宛に依頼し、回答を集めたもの。回答書はいずれも便箋に縦書きだが、書式は統一されておらず、載せられた情報は執筆者ごと異なる。島袋からはとにかく字名と屋取名が求められたらしく、この2つの情報はどの回答書にも記されている。中城村を例に記述すると、「1. 字」として伊集、和字慶、津覇、奥間、安里、当間、新垣、屋宜、添石、伊舎堂、泊、久場、熱田、和仁屋、渡口、島袋、比嘉、喜舎場、仲順、

瑞慶覧、安谷屋、荻道、大城の23ヵ所、そして「2. 小字(土地整理後行政区域トサレタルモノ)」として南上原、北上原、登又、屋宜原の4ヵ所が記載されている。このうち、前者が琉球王府時代より成立していた古村(ムラ)であり、後者がヤードウイから明治32年の土地整理に際して独立した新村である。さらに字内にある「所属屋取名」も同調査票には記されており、それは和字慶ノ前、安里、仲松、謝名堂、前原小、高江洲、仲真、前大屋小、下ノ川、台城、石平、奥間ノ上、親南原、風花、米須、袖花、屋良小、大平である。

(6)——大正8年に国土地理院が地図を作成する前段階として作成した調書。国土地理院所蔵。中城村について、地名の前に「字」と付された23ヵ所(古村)と、付されていない4ヵ所(新村)、そして「字ニ属スル部落」(屋取)に集落が分類されている。

(7)——本稿ではブツダンで統一したが、カミダナと呼ばれることもある。というのも、代数を経た家(宗家)では位牌のほかに、香炉が祀られているからである。「位牌に名を記された先祖はせいぜい二十代以内である。位牌以前の先祖は父系親族の宗家『ムートウ』の神棚でまつられる。名も知られていない遠祖は神棚の香炉をとおして、抽象的な祖神『ンチャンウヤフジ』(お神となられた祖先)として合祀される。それゆえに神棚と呼ばれるのである。位牌と神香炉は、個性的な祖先と抽象的・集合的な祖神、一族の分節と宗家の関係、に対応している」[平敷 1994 32頁]。

(8)——「墓口を開ける人は死者が子年であれば、子・丑・寅・卯・辰はカイクミと称され携わることができず、巳・午・未・申・酉・戌・亥はウチハナと称され、墓口の開閉に携わってよい。実際は墓口は大きい石なので、びくともしない。それで3回たたいて開けるしぐさだけをする。たたいたら、あとは誰が開けてもかまわない」[名嘉真 1989 240頁]。

(9)——いなんせ斎苑は沖縄県の南部広域市町村圏事務組合が運営する火葬場で、2002年に供用が開始された。大人の使用料金は、那覇・浦添市内が25,000円、その他圏内(糸満市、豊見城市、南城市、南風原町、与那原町、久米島町、渡嘉敷村、座間味村、粟国村、渡名喜村、北大東村、南大東村)は50,000円、南部広域市町村圏外は60,000円である。本稿の事例は中城村の方なので60,000円を支出した。なお、適用区分として大人(満12歳以上)以外に、小人(満12歳未満。那覇浦添＝

15,000円, 圏内 = 25,000円, 圏外 = 30,000円), 死産児(那覇浦添 = 8,000円, 圏内 = 15,000円, 圏外 = 16,000円), さらに改葬遺骨(那覇浦添 = 10,000円, 圏内 = 18,000円, 圏外 = 20,000円) という料金が設定されている。

(10)——「以前の安謝火葬場(那覇市)では火葬に2～3時間ほどかかっていたから, 大幅な時間短縮である。このため, 以前ならば参列者は火葬の間1度喪家に戻っていたが, いなんせ斎苑ではその必要がなくなった。斎苑にはそのための待合室が設けられている」[加藤 2010 128頁]。

(11)——四十九日までの7回のナンカスコー(七日焼香)のあとは「ヒヤッカニチ(百日目)とニンチスコー(年忌焼香)がある。ニンチスコーは, イヌイ(一年忌), ンチュヌイヌイ(三年忌), シチニンチ(七年忌), ジーサンニンチ(十三年忌), ニジューグニンチ(二十五年忌), サンジューサンニンチ(三十三年忌)の6回行われる」[名嘉真 1989 243頁]。

(12)——藤井正雄は「墓の年忌」について「比較的新しい習俗」, 「死者がでないことをもって慶事とする考えが, 墓の年忌なる習俗を生み, 次第にひとりだちしていった」と考えている[藤井 1989 321頁]。

(13)——四十九日まではそれぞれ行ったが一周忌は母の命日に合わせて父母一緒の日に行っている。

(14)——ここに紹介した新聞資料は井口学氏の情報提供

によるものである。

(15)——尾崎によると, 大宜味村喜如嘉における火葬第1号は, 火葬場の落成祝賀会(1951年12月)の1週間後, 1952年1月に亡くなった85歳の女性だった。もし第1号が若い人だったらタタリと受け止められ利用が続かなくなるかもしれないと心配されていたが, 高齢の女性であり, その火葬骨が白くきれいであることで皆が満足し, 火葬場の利用が進んだ。こうした経緯を尾崎は「納得の論理」として論じている[尾崎 1996]。

(16)——最新(2013年6月)の統計資料(<http://www.pref.okinawa.jp/toukeika/so/so.html>)から算出してみると, 県人口1,414,883人, 自動車保有台数(総計から被牽引牽引車, 小型二輪車を引いた台数)は1,020,554台で, 1台あたり1.4人である。

(17)——最新(2013年6月)の統計資料から算出してみると, 乗用車(普通および小型)は358,543台で, 1台あたり3.9人である。

(18)——「県下の広い範囲にわたって, いまでも墓にはフィザイ, ヒジャイなどと通称される守墓神がいると考えられている。私は, この神は中国の后土神に淵源をもつと考えている。その称呼は, 墓の向かって右隅(墓からみた左隅)にいますと考えられているところに起因する俗称」[窪 1989 359頁]。

## 引用・参考文献

- 赤嶺政信 2000「沖縄県」国立歴史民俗博物館資料調査報告書10『死・葬送・墓制資料集成 西日本編2』国立歴史民俗博物館
- 赤嶺政信 2002「奄美・沖縄の葬送文化—その伝統と変容—」国立歴史民俗博物館編『葬儀と墓の現在 民俗の変容』吉川弘文館
- 今尾恵介 2009『日本鉄道旅行地図帳 全線・全駅・全廃線 12 九州沖縄』新潮社
- 尾崎彩子 1996「洗骨から火葬への移行にみられる死生観—沖縄県国頭郡大宜味村字喜如嘉の事例より—」『日本民俗学』207
- 親泊元信 1990『『木氏親泊門中』の繁栄を願って』『カミジュー自伝』沖縄自分史センター
- 加藤正春 2010「奄美沖縄の火葬と葬墓制—変容と持続—」榕樹書林
- 窪徳忠 1989「清明日の墓参について」渡邊欣雄編『祖先祭祀』凱風社
- 坂田正顕 1999「現代遍路主体の分化類型としての『徒歩遍路』と『車遍路』 現代遍路調査によるその実像」『社会学年誌』40
- 関三雄 1999「四国遍路と移動メディアの多様化 遍路再考」『社会学年誌』40
- 武井基晃 2004「与論島における改葬とその場所について—火葬場開業前夜までの墓地の変遷と整備の事例より—」科学研究費補助金研究成果報告書『骨と位牌—東アジア周縁社会における先祖祭祀の象徴に関する比較民俗学的研究—』
- 武井基晃 2007「伝承行為としての歴史観の修正とその必要性—沖縄本島におけるムラ・ヤードゥイ両集落の関係を事例に—」『日本民俗学』251
- 武井基晃 2008「火葬場が変える島の葬送—終焉に向かう与論島の洗骨・改葬習俗とその後の展望—」科学研究費補

- 
- 助金研究成果報告書『遺体処理と祭祀に関する比較民俗学的調査研究』  
多良間利絵子 2004「沖縄の家屋における座敷配置に見られる対立関係—南風原の事例から—」『沖縄民俗研究』22  
津波高志 2012『沖縄側から見た奄美の文化変容』第一書房  
名嘉真宜勝 1989「沖縄の葬送儀礼」渡邊欣雄編『祖先祭祀』凱風社  
長嶺操 2012「糸満漁民の分村と墓—八重瀬町字港川の場合—」『沖縄民俗研究』30  
南風原町字喜屋武編 1985『喜屋武の移りかわり』  
藤井正雄 1989「沖縄における墓供養—供物を中心として—」渡邊欣雄編『祖先祭祀』凱風社  
平敷令治 1994「沖縄の位牌祭祀」沖縄国際大学南島文化研究所編『トートーメーと祖先崇拝—東アジアにおける位牌祭祀の比較—』沖縄タイムス社  
宮城邦治 2013「復帰四〇年の検証①沖縄の開発と環境保護—生き物の視点から—」沖縄国際大学公開講座委員会編『世変わりの後で復帰 40 年を考える』沖縄国際大学
- 

#### 参考資料

- 
- 『沖縄県交通白書』昭和 58 年版  
『沖縄県人口の推移（明治 36 年以降）』昭和 49 年 沖縄県企画調整部統計課資料係  
『沖縄県註記調書』大正 8 年 国土地理院蔵  
『琉球警察統計書』1963 年版, 1967 年版, 1971 年版

（筑波大学人文社会系，国立歴史民俗博物館共同研究員）

（2013 年 12 月 21 日受付，2014 年 5 月 26 日審査終了）

## **Changes in Funeral Customs and the Increasing Use of Automobiles at Ancestor Worship : A Case Study of the South-Central Part of Okinawa Main Island**

TAKEI Motoaki

This article discusses the high economic growth in Okinawa after World War II, as well as changes in their funeral rites and grave systems before and after it, by examining shifts in two aspects: the introduction of cremation and the involvement of funeral directors; and the motorization of society. Section 1 outlines the funeral rites and grave systems and the motorization of society in Okinawa. Section 2 describes the outline and history of a hamlet formed by reclamation of noble class, namely Nakagusuku Village, Nakagami District, which is located in the south-central part of Okinawa Main Island and serves as a case study of family graves. The section also sketches out Kyan, Haebaru Town, which is covered by “Collection of Materials on the Death, Funeral Rites, and Grave Systems” as an area with a patrilineal-based grave system. Section 3 uses the results of a questionnaire survey on funeral rites in Nakagusuku Village in the Showa (1926–1989) and Heisei (1989–) Eras to discuss the changes caused by the introduction of cremation and the involvement of funeral directors. For example, the date of a funeral service is determined by when a cremation service is available. With regard to the involvement of funeral directors, the section uses the record of expenses of a recent funeral to analyze the spending trend during the period from the funeral service to the memorial service marking the 49th day after the death. A comparative study is also undertaken with Kyan, Haebaru Town.

Referring to other articles, Section 4 discusses the process of the shift in body transportation from bier to automobile (hearse) as automobile use was spreading in the society and funeral practices were changing. Moreover, statistical data, such as the number of private automobiles and licensed drivers in Okinawa, are used to indicate how the motorization of society was progressing in the society after World War II until the retrocession of Okinawa to Japan. Based on the field study of the author, Section 5 describes how festivals and rituals for ancestors (e.g., the Seimei Festival to visit graves and the Umachi Festival to visit the head family house to pray at the family altar) are performed now in Okinawa and how automobile use has affected them. The section indicates that while automobiles enable the elderly to continue to attend these rituals, in another aspect, they prevent generation changes.

Key words: introduction of cremation, involvement of funeral directors, case studies of the Showa and Heisei Eras, festivals and rituals for ancestors, motorization of society

---